

ふたつの青春：淪陷区・北京の鬱屈と飛翔 (1)

立石, 伯 / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

1996-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019855>

ふたつの青春

——淪陷区・北京の鬱屈と飛翔（一）——

立石 伯

（一）

青春は寒々しく鬱陶しい季節である。また逆の在りようも真である。人生の大きな深い深淵のなかで呻吟するものだといえようか。青春期のさまざまな試行は、後年になつて豊かな実を結ぶことがあり得る。また、真摯な思いの多くが、無惨にも叩きつぶされて、立ち上がれないほどの打撃を蒙ることもしばしばである。これから主に素描していこうとするふたつの青春は、酷いどん底で呻吟し、のたうち回つたあとに印された貴重な血の軌跡である。幸いなことにそれが同時に、自らの文学と思想を青春の深い闇から汲み上げることを可能にした契機でもありえたのである。この消息は逆説的に見える。この微妙な関係のうちこそ、人生の一つの真実の相が垣間見えてくることにほかならない。

中蘭英助と竹内好の青春は、北京で花開き、同時に終焉を迎えた。日本軍占領地北京を日本人は和平地区といい、中国人は淪陷区と呼

んだ。他国の軍に占領された都市で、占領者の側の国民として生活するということであった。この古都でのふたつの生は、精神の闘いの血飛沫をその跡にくつきりと刻みつけていて、傷だらけの魂の厳しい在りようを示している。しかしながら、そういう青春の在り方の凝視において一つの精神の指標を発見しうることに、人間の真実を開示しうるものが可能なのである。そして青年たちの、自己と他者と時代と歴史に対する葛藤がつづくところに、精神世界のむごたらしさと重苦しい苦衷が共存している様がよくつきりと浮かび上がっているのである。けれども、この惨酷と忍耐を生ききるこのうちに、精神の荣誉が輝きだしてくるということができる。

中蘭英助と竹内好の北京生活は、いわば恰好の対照をなしている。前者は北京で青春を発見し、同時にその終焉を自らの思考と行為で確認し、後者は青春の終焉のみをこの地で厳しく確認せざるを得なかつたのである。中蘭英助が一九二〇年に生まれてはじめて企てた北京訪問と、竹内好が一九一〇年に生まれて二度目に北京滞在という決定的な相違のもたらしたものはある。同時に滞在した一九三

八年は、中藺英助一八歳、竹内好二八歳に当たる。中藺英助は父親との進路を巡る衝突をきっかけにして、またいわゆる漫然渡支という形で植民地的な自由にあこがれての一種の家出を企てた。中国は現在の苦境から逃れるべき一つの目的地でしかなかった。一方、竹内好はすでに中国文学研究会を組織して「中国文学月報」(のち「中国文学」)を刊行し始めていた。中国古典や当代文学についての一定の認識を形成した少壮の研究者でもあった。この差異は決定的なものであり、両者の北京観をも相違づけるものにほかならなかった。

中藺英助はどのように生きようとしたのか、いやどう生きてきたのか。氏は長春(新京)を経て北京に遊学するつもりであったにも係わらず、三七年の日中戦争勃発により、仕方なくその地の語学校に入り、旧満州国經濟部日系下級官吏となった。竹内好も、三七年七月初旬に北京に向け出発の予定で「中国文学月報」二八号に留学のことを記して読者と別れを告げながら、「事変」のために延期になった。しかし、この出来事はもつとも信頼していた武田泰淳の出征を送ることを可能にしたのであって、その翌日の一〇月一七日に出発したのは僥倖といえたかも知れない。ともあれ二章で検討するよるに、日中戦争前の北京や中国各地での激しい反日や抗日は北京とその周辺を通過してしまっていた。彼は中国人の反日の実体を体験したかったのに、すでにその熱狂は北京の街から消え去っていたという。その無念さは竹内好の内面に残りつづけたのであった。

一方、中藺英助も北京に入ったのは北京近辺の動乱が落ち着いたその翌年の三八年である。貧しい放浪語学生として北京の城門を一八歳の少年後期・青年初期の氏はくぐったのであった。そして、互いに見知らぬままに竹内好と同じ北京生活を送り始めたのである。

氏はここでもやはり放浪語学生の生活はつづき、意に添わぬ生活を改め大学進学をはかるべく帰国を企てた。が、徴兵年齢に当たることを考慮して、逆に徴兵から遠ざかるために張家口の鉄道局に就職する。翌四〇年、この頃母益代と妹が北京にやってきて一時生活をともにしたはずである。同時に、坂井徳三の紹介で邦字紙・東亜新報社に入社し学芸記者となるとともに、北京大学・錢稻孫の文学院聴講生となっていた。この頃から小説や詩を書き始めたはずで、四一年一〇月の「京津事情」に「ながれ」という短編小説を発表していた。つまり、正式には翌四二年二月発行の第一〇号の「燕京文学」から同人になるが、本格的に文学修業を自己に課し始めたということができる。

ここでまた、氏と竹内好との目に見えない遠い交錯を記しておく。四〇年に氏は、北京大学の錢稻孫の知遇を得たことは右に記したが、竹内好は三八年九月まで錢稻孫と一緒に近代科学図書館で日語の高級班で教鞭をとっていた。また、周作人との両者の関係は記すまでもないかも知れない。つまり、北京城の中で謎めいた目に見えない網目に捉えられていたといえよう。

この小論では、氏らの吸った淪陥区・北京の重苦しい空気をあたく限り類似した環境で呼吸するために当時発表された文章に限定して考察する。どうしても不分明な点のいくらかは戦後発表のものを参観するとしても、三七年の日中戦争から四五年の敗戦までの、つまり氏の北京滞在中に発表したものを中心に分析・検討することになる。

氏の当時の文章を概観することからまず始めたい。いうまでもなく、きわめて僅かの資料をもとに推断するということになる。こ

ここで手元の資料を一覧する。既述の「ながれ」、「燕京文学」に発表の作品に、四二年二月一〇号「回教徒馬の死」(詩)、同年七月一一号「たあ・いえん奇聞」(小説)とコラム、同年一〇月一二号にコラム、四三年三月一三号「狂犬」(小説)、四四年八月一七号「夢は枯野を」(江崎磐太郎追悼)、四四年九月一八号「批評について」(時評壇)等がある。手元でない号に「陽炎」(二四号)、「恢復期」(詩)と「時代の子」と演劇付近」(一五号)、「ひげめに就いて」(一六号)、「夢想作家」(一九号短篇小説特集)等がある。「燕京文学」一九号は刊行予定の一〇月かその少しあとの時期に発刊されたであろうが、二〇号まで編集発刊されたかどうか不明である。一八号から正式に紙の配給を受けたらしいから四五年の敗戦の年にも係わらず発行されたかも知れない。(手元でないものは雑誌の目次一覧による。)他に氏の出世作といえることのできる北支那文化賞受賞の「第一回公演」(四四年一・二月「北支那」)があり、四四年(自筆年譜では四二年だが四四年ということである)に勤務先の新聞に連載したらしい未見の「城壁」(「東亜新報」)等がある。

右に「第一回公演」を出世作と述べたが、氏は五〇年「近代文学」に発表した「烙印」を処女作と呼んでいる。「第一回公演」を根本的に書き直した「烙印」は、敗戦後の文学的再出発とみなした方が妥当であろう。つまり、わたしは「第一回公演」を習作から脱した自立した力を内在した処女作と考えるためである。同時にしばしば云々されるように、作家は処女作に向かって成長するという見地を承認しておく、氏は文字通り「第一回公演」に向かって大きく高度に成長した、文学世界を深化したということが出来る。

早い時期のそれらが若書きの習作に類するものであれ、右に列記

した諸作品の大概を分析していききたい。これらの作品は、当時の同人達や雑誌読者、敗戦後には雑誌そのものの大半が失われたため、数人程度の人しか目を通していかないはずだからである。また、作品自体の評価はともかくとして、おそらく氏の発想と文学的思考の核や原質は初期作品群のうちにくっきりと浮き彫りにされているはずでもある。それが同時に、氏の青春の苦悩と鬱屈と屈託をある程度あぶり出してくれると考えられるからでもある。

白系露人エミグラント、つまり「亡国の民達」の一人であるタラソフという青年が不良外人として放逐される顛末を描いた「ながれ」は、いわば一筆書きのクロッキーに類する作品である。そこに彼に同情を寄せる一人の日本人が寸描されるが、一エミグラントとして他国のそれに同情する青年の在りようが一つの構図としてまず描出されていたことに注目できる。二十歳すぎの作者の自己に密着した生の在り方についての独自の目の付け所があり、自己自身の日本人としての生き方の投影という隠されたモチーフを読みとることが出来る。つまり、このエミグラントの裡には、抑圧された民族・国家の文化を学ぼうと中国にわたった氏の面影が彷彿としているといっても牽強付会の言ではない。どのような経緯で、「京津事情」という天津で発行の居留民団関係の雑誌に掲載することになったのか不明であるが、氏がこのようなモチーフで習作を描いたことは自己認識の在りようにおいて興味深いことである。

氏が小説とともに詩を書き始めたことは、少・青年時代からの日本のモダニズム関係の詩人達やアルチュール・ランボーなどの読書から首肯できることではある。「燕京文学」加入後の最初の作品に「回教徒馬の死」がある所以である。この詩は、多民族国家中国のうち

の回教徒と漢族との葛藤を背景にして、漢人の異民族支配・差別など罪深いひどいもてなしに対して「不信」におののく回教徒・馬が設定されている。彼に物乞いなどで命をつなぐのではなく砂漠に去れ、そして裁きの日を待てと懲憚する。そして、最後の聯で、一回教徒の死屍が地平線に浮かんでいる様をおいた、一種の懐愴な心的な風景を歌ったものである。この回教徒が仏教徒の日本人であつてもおかしくはない、ただ、当時日本人が指導民族と称して中国大陸に君臨していたという決定的な相違があるにしても。つまり、この詩において他国に移住した一つの実存の宿命を見据えていることに変わりはないといふことができる。

ところで、ここでまた竹内好との交錯について触れる。彼は四〇年に回教圏研究所の研究員として勤務するようになる。中国問題を考えるとき、漢族の宗教やイデオロギーと異なる異教徒や少数民族問題は重大な政治的・文化的問題を内包している。彼が回教圏を旅行していかなる課題を掌握したかについては、やはり二章で検討するが、両者ともその考察するモチーフはいささか異なるとはいへ、異民族問題と宗教問題の重大さについて我が身に引きつけつつ凝視していたのである。中藺英助は、漢族から見れば日本人も異民族であり、当時は日本人が侵略者・圧制者であつたにしても、異民族支配と抑圧に敏感たらざるを得なかつたといふこともできる。その自己批判とともに中国の「中華思想」も等価な形で批判の俎上にしたのである。

さて、「燕京文学」一一号は、この雑誌にとって一つの大きな思想的転機を孕んでいた。外地中国において感受した太平洋戦争に関して、その認識と思想的価値の重さを論じることのできる号となつて

いる。私は「燕京文学」と『中国文学』——淪陷区・北京からの光芒」というこの小論と対になる評論で、日米開戦により太平洋戦争へと戦線が拡大され、それまでの「大東亜戦争」の性質や在りようが変質したときに、「燕京文学」で提出された「華北文化の考察と我々の立場」と「中国文学」で主張された「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」(四二年一月八〇号)とを比較対照しつつその在り方を別決した。そこで「燕京文学」の同人達がなぜ華北・北京の地で文学・芸術に取り組まなければならぬのか、偶然であつた在北京の必然性は何なのかということとその戦争観や時代認識を含めて追尋したのである。ここで再説はさける。

この号に氏は「たあ・いえん奇聞」と短文を寄せている。この小説は、「奇聞」という日本では希な阿片取引に関するモチーフに引きづられ、金を目当てに麻薬取引に誘い込まれた孫という庶民の哀感を描くに止まっている。彼は田舎から出てきて、「北京が永い歴史で磨き上げられた、世界にいくつとはない美しい王城市」であることにも気づかず、三十幾年も胡同で埃臭い空気を吸い続けていた。彼は臨月の女房と肺病に苦しむ子供を持った五十数歳の貧しい哀れな庶民にすぎなかつた。阿片密輸常習の巨魁である知人の劉の手先になつた彼は、北京と張家口の間を麻薬を隠して往復しようとするのである。しかし、密輸の途中逮捕の危険を避けるべく証拠隠滅のために麻薬を飲み込んでしまうが、袋に入れた麻薬が全身に回り北京駅で昏倒するところで小説は閉じられる。この小説には削除部分や数カ所見られるから、麻薬関係の犯罪に係わる詳細な既述やいわゆる反道徳的な描写があつたのかも知れない。いわば、この綺談は氏の怪異に寄せる趣向や、胡同に生息する無知な庶民達の生の悲惨

を見据えようとする姿勢や態度の何かを一部であれ開示しているといつてもよい。

この小説よりも、「端書通信」欄の次の短文には戦争についての肉声が直接に表面化されていて、時代の大きなうねりを感じさせるであろう。四一年の十二月七日に氏はたまたま行きつけの館で映画を見て、その翌日、「翌クレバ、人類ノ古イ歴史ノ曆ガ掛ケ変ヘラレタ日、アノ嬉シ泣キニ泣イタ感激ノ日デシタ。」と記す。また、それ以降古い映画であれ、人形のように綺麗な中国人達が姿を見せなくなくて映画館に閑古鳥が啼いても、いいものはいいのなのだという価値意識のもとで自分は映画を見つづけるのだとも記すのである。時代の動向に対して斜に構えた青年の客気とこの日中戦争から太平洋戦争に拡大された戦争に対する感懐は右に記した雑誌の立場の宣言である太平洋戦争についての認識の基底に横たわっているものと等質である。また「中国文学」が鮮明に提出した観点と同様の認識に基づくものでもあったといえる。

ところで、これまで素描した諸作と比較して「狂犬」には、文学のある確かな手応えが感じられる。一人の青年が北京の街で母と妹と生活をともにすることになり、その生の中の鬱屈と怒りと憎悪とが遠近法確かに捉えられている。語り手の「私」・尾崎圭太は、母と妹の世話を任せたにもかかわらず、追い出してしまった義兄に北京で偶然に顔を合わせ、母達に対する彼の仕打ちに怒りを爆発させる。また妹の結婚相手がかつて左翼運動に係わっていたことを口実に引き離してしまったことも加わって、「僕は人間の激情や憎悪がどの位に迄達するものか」を肉体で感じながらも、ついに義兄に「泣き笑ひにも似た」弱気を見せて自虐に陥ってしまったのである。一

方彼は、祖母との嫁姑関係でいじめられた母をかつて見捨て、「支那で自分一人の新しい生活を打樹てる喜び」に漬ろうとして故郷も捨てた。また、外地生活の苦境の中で母が自分を頼りにしていると感づくと、生活の清算に名を借りて、母と妹を北京に残したまま勤め先のある田舎に引っ込んでしまった。彼は文字通りエゴイスティックに生きたのである。しかし、義兄に追い出された母と妹の生活を見かねて北京に舞い戻らざるをえなくなり、共に生活を始めることで、自分と母のある宿命を直覚しはじめたのである。この作の副題に「怒りの虫と貧乏の女神」がある所以である。

母が彼の無目的な怒りに駆られた乱行によって洗濯屋にだしたズボンを取りに行ったとき、彼らの不運が堰を切っておとされた。その店の「狂犬」が母に噛みついたのである。母は狂犬病をおそれた彼につれられて朝鮮人の外科医に手術を受けるが、その時彼は、「私が狂犬で、老いた母に喰ひついて引きずり廻したのは、此の自分ぢやないかといふやうな、突拍子もない恐ろしい思ひがちらと頭をかすめて慄然とした。」と悟った。つまり、さまざまな怒りに駆られる彼は、自己を「狂犬」とみなさざるを得ない自責に苛まれる生を送りつづけたということにほかならない。無目的に発散する怒りこそ、彼の北京や外地生活の鬱屈や屈託の象徴であり、戦争下に自己の意志と思いが寸毫も叶えられない、無為と無力感に対する爆発でもあった。

この作品は構成や自己対象化がまだ充分でないし、明確に対象が把握されてもいない点が残念である。また、吹っ切れない情念に足を取られている側面も散見された。にもかかわらず、文学の手応えが感じられるといったのは、戦争下に旧満州や華北に居留した人間

の思いや鬱屈、日本と中国の関係への眼差し、時代の大きな陰影や微妙な翳り、超越的な力などに対する直覚がゆくりなくも刻印されているからである。いわば、これまでの作品と異なつて、自己と自己を取り巻くさまざまな関係や状況、時代と歴史の陥没などが文学的に考察されたといえる。特に《私》の内面の闇が解明の対象に据えられたために小説へと向かう青年の志が覗見されるゆえである。さらにあえて付け加えるならば、母を親切に治療した外科医が朝鮮人であつた点は、非抑圧民族に対する作者の一定の思い入れがあつたというべきであろう。

この習作を経て、文学的な自己解明の眼差しが深まつたといえる。氏は一挙に「第一回公演」へと大きな歩みを進めることができた。さらにこの作品によって自己と時代についての文学的な考察に本格的に立ち向かつたのだといえる。この達成の位相をもとにして、四三年春頃から四四年夏前にかけて書かれた短編小説「陽炎」や詩「恢復期」や四四年末か翌年はじめの「夢想作家」などに目を通したものである。

北支那文化賞に応募して受賞した「第一回公演」の選評にまず目を向けてみよう。選者の一人の坂井徳三が、「中藪君は、じみに、じつと、よく小説勉強をしてゐる。」「彼の頬が、蒙古風の埃と匂とロマンストを浴びてゐるところに、彼の作品の好きと将来性とがある。」あるいは「個人的に考へるならば、中藪君の今回の当選は、故江崎磐太郎の弔合戦とも云へるだらう。」などと記すのは、当時の氏をよく知る人の言として傾聴するに値する。一方もう一人の選者の平田小六は、書くべき対象の明確な整理を促し、作品後半の構成の乱れを指摘していて、妥当な指針を与えていた。しかし、この作

品には「戦争状態にある日中両国の青年同士の友情は成立可能か」という強烈なモチーフが意識的に対象化された。したがって、この作品世界を支配する文学的な精神は、ひたすら異国にある日本人の青春とその意味を中国人と中国の磁場のなかで凝視することに収斂されたのである。それではどのような青春、自己、日本人、中国人が対象となり、どのように描出されたのか。

黄塵の季節、もん・ぐ・ふおんが吹き荒れる北京の街で、亜洲新報の文芸部記者の早坂順三は、新華北劇社演出部長の楊孝年を偶然の機会に知ることになる。孝年は事变勃発後に閉鎖された大学を中退して北京にとどまつた。友人の多くは解放地区に去つたのちの六年間、淪陷区と呼ばれたこの街で誤解と思想的な混沌の中で苦闘する生活を選んだのである。つまり、「話劇運動」(新劇運動)を推進し、「硝煙の中から和平地区に立ち上つた最初の青年演劇人であり、青年文化人」だといわれるようになっていた。彼は演劇イデオロギ―も理念もなく愛情悲劇を上演しつづける燕京劇社を去つて、「これまでのもの一切の全面否定の上に」新しい話劇を構想した。彼の生き方が「焦燥、逃避、混迷」とみえようと、中国人と中国の運命と将来を見据えつつ、劇団上層部の私腹を肥やすための上演の目論見を否定しようと新しい劇団での上演に賭けた。つまり、米英の東亜侵略とその屈辱、悲惨の下から敢然と民族解放の戈を執つて立ち上がるとする中国民衆の姿を「怒吼吧中国」で描き出そうとしたのである。立ちふさがる難問にそれぞれの場において戦う彼と順三は、人間的に真摯に対峙した。順三ははじめて中国人と腹を割つて話したのであつた。その結果、知己になれた喜びとともに、孝年の生き方に一抹の不安を感じざるをえなくなつた。取り組もうとして

いる演劇に彼が「全身全霊をうちこむ生き甲斐を探してゐるなら……ああ、これは大変なことなんだ。」とも予測する。そして、順三は苦悩に満ちた彼の本音を突き止めて援助したいと考えるまでになる。というのも「そしたら誰の責任だ。楊自身が悪いのか？ 敗北したのか？ さうぢやない。自分が傍観者にとどまつて何もしなかつたからなのだ。」と反省するからである。いわば、日本人もへ傍観者」として無関係を装つて、彼らの闘いを高みから見物することが許容されないと体得したのである。

その認識の上で、東安市場の喫茶店吉士林で、六年間救いのない救いにあがき、きびしい精神の放浪や遍歴に苦悶していた孝年と彼は再びきびしく対峙した。順三は、今は無関心と諦観に変化したかもしれないが、きつと彼の瞳は日本人に憎悪と敵意に満ちた光を宿し、ことあるごとに日本人にその情念を投げかけていたはずだ、と想像した。所詮日本人である自分は彼の心の深い闇を知ることにはできない、「やつぱりいたはつてやらなくちやいけない、と思ふと同時に楊と自分は、永遠に中国人であり日本人であるに過ぎないことを悲しくさへ感じた。」とも思うのであった。ここでは順三の庇護者的な立場がほのかに浮き出ているにしても、ともかくそういう悲観的な見方と、動揺する考えにとらわれた彼に対して、孝年は次のように「青年」という普遍的な見地から主張した。

「だつて早坂さん、あなたは勿論日本のお方ですけど、つまり青年でせう。さう青年に間違ひない。私と同年位ぢやないでせうか。私も青年です。青年なら青年同志の心は通ずるものです。若々しい感情も、精神も、みんな通ひ合ふ筈です。私たちの世代、それはほかの年代や社会では通用しないこと、言葉な

んかでは表現出来ないことまで、私たちの鋭い、強い感受性で感じあふ筈です。凡ゆるものを超へて、青年の言葉があるんじゃないでせうか！」

順三は彼の言葉に同じ感情と苦悩を読みとり、さらに醜悪な現実や歴史とともに立ち向かおうと決意して、ある時にはひるみがちな孝年に向けて次のような言葉を投げかけた。「現実、勇氣、行動、生命、逃避」、こうした人間的な現況と意志をどう考えるのかと。これに対して孝年は、「『最後の努力』」と応えた。「最後の努力、もう一度きりの努力をこゝろみる。」意志を示し、劇団上層部との軋轢で投げ出そうとしていた芝居を自分の目的通りに上演しようと翻意したのである。このような血のにじむやりとりの果てに、彼らの裡に「音高く、奔流のやうにお互ひの友情が、総身をひたして流れ交ふのを覚えた。」という。彼らは内的な相互理解と人間的な普遍的意味の一端を明確に把握することができたのである。

ところが、上演された劇の評価は毀誉褒貶相半ばしたが、順三の好意的な見方にも係わらず興行的に失敗して、劇団の崩壊につながった。けれども、「米英の非道をあばきその撃滅を主題にした」劇に孝年の秘められた祈願と救いがあり、彼は文字通り「新しい第一歩を踏み出した」のだと順三は思ったのである。そして、この作品は「黄塵季節が去り、もん・ぐ・ふおんがすつかりやんでしまった頃、楊孝年は新華北劇社の残党をあつめて再起を図つたのであった。」という一文で閉じられたのである。

簡単に素描したこの作品には、けれども言葉の裏に多くのものが隠されていたというべきである。まずひとつは劇のモチーフとされた「米英」撃滅は、ほかでもない「日本」撃滅の諷刺が潜んでいた

かもしれぬことが、孝年の日本に対する憎悪の瞳から類推できよう。順三がもしそういう劇が上演されたら大変なことになると感じた点もそこに繋がるはずである。もとより順三は、「彼には、自分らの叫ぶ東亜の民族としての共鳴も共感もまだ全く生れては居ないのか」とか、「どうして自分の方に苦痛や苦悩が激しいなんてことがあるもんか」とか、自己の矛盾と相克の中で思い悩んでいた。また、自己と孝年との正確な距離をどのようにとりうるのか、とるべきなのか、混沌たる状態でもあった。

一方、断るまでもなく、孝年の事変後六年間の苦悩と痛憤は、解放地区に去ることなく、また日本の協力者になることなく、自らの芸術的良心と理念に忠実に城壁の中で行動することにはかならなかった。この選択こそもつとも困難なものだと自覚しつつ、あえて汚濁した醜悪な現実と歴史の中に身を投げ入れたのであった。彼の真の苦闘はそこにあり、順三との友情の確認こそ、時代の悪気流と醜劣な歴史の中で、超越的な理性の契機を模索した線上に成就できたものであった。孝年の自己鞭撻に感化されて順三は、揶揄的な日本人の評論家に対して、情熱を燃やすことは、「新しいものの創造」に繋がるからこそ、冷めた理性を排するのだと主張する根拠を獲得したのである。作者は領事館の検閲を細心に考慮しながら、このような表現を獲得したのであって、これはまさしく一人の作家の出現を告げるものである。もとよりそれが充分であったかどうかは問うまでもない。北京が日本内地より「自由」と言っても自ずからな限界があることは断るまでもないからである。

ところで、作者は、孝年を描写する際に、「おびえたやうな、そのくせどこか傲岸な顔」、「蒼白で、始終おどくしたやうな不安と苦

悶」に包まれた顔、「ぎら／＼と熱病やみみたいに輝いて」いる眼を強調した。これは主人公・順三の、誤解と蔑視につつまれて城壁内に居残った中国人芸術家に対する《違和》を語っていたであろう。ところが同時に、この感性の違和に始まり、風土、歴史、国家などについての違和を通してしか孝年と結びつくことが不可能だと直覚するように順三はなつたはずである。この順三の内的な葛藤こそが、感性、民族、国家などを超えて人間性を認識し合う狭い隘路だと、密かに作者は主張したかったにちがいないと判読できるのである。つまり、孝年の表情を通して、中国人と中国の苦悩や憤怒や諦念などを表面化したのである。これはいわば魯迅のいう《血債》の確認と自覚にほかならないのである。あるいは、自分達の払われるべき血債の重大さの体得でもあるということができる。

さきに四四年に連載したと記した「東亜新報」紙上の「城壁」は、「第一回公演」を受けて、さらにそれを緻密に、構想を大きくした作品と言ふことだから、ますます目を通したくなる誘惑は強いのである。つまり、選者たちや友人たちの批判や教示に応えるべく、書き得なかつた機微や真実をできる限り発展的に書き進めたというものではなかつたかと推察されるためである。

きびしい魯迅的な血債を認識した氏の文学的な覚悟は「批評について」で次のような表現を獲得した。当時の指導的思潮や文化は「方向づけること、狂奔し猪突すること」のみ急で、現実の根柢を見究めること、基礎づけること、努力が些かも払はれない」から「流れの奥底にある真実を見失ひ」探究や建設を忘れてしまうと批判的にいう。

「われわれはかゝる戦ひのさなかにこそ現実への根源的探求を

断念することが、まさに行為的主体の否定でしかないことに気付く。さればこそ今日、現地の文化創造を阻むものは、根本的洞察の精神の欠除であり、そのやうな精神活動の不振は、結局正しい批評活動の無いことに起因するであらうと思はれる。

批評や反省を単に後退的、消極的意識の働きと見る人々は、批評が人間の認識活動の構成分子であり、人間の認識は批評的精神活動なしには成立し得ないこと思ふべきであらう。批評はむしろ認識を通じて人間生活の創造にたづさはるのであり、批評即創造活動の一つといへるのである。文化が興るとき、文化評論またとみに旺盛となる。」

ここでも戦争の進行状況と時代の趨勢に一定の挨拶を送りながら、自分の、日本人の、北京の、華北の、中国と中国人の現実を根底から凝視し沈思し洞察することがなければ、真実や創造から置き去りにされてしまうのだと主張したのである。多少肩肘張ったところが散見されるにしても、背筋の伸びたさわやかな論理と感性である。既述のように、日本内地ではこのような性質の文章が徐々に少なくなっていた時機に、氏が北京で書きたいことの大半を書き得たという点に、居留地北京のいい意味でのエア・ポケットのごとき空間が存在したのである。そして氏らは、それを自覚しつつよく闘ったといえるのである。にもかかわらず、同時に、氏の文学修業の闊達さと見えたものは、召集と戦争の危機と不安のもとでの「自由」に過ぎなかったことを再認しておきたい。

氏は「夢は枯野を」で痛切な江崎磐太郎追悼を書いた。二十九歳で逝った友を心底から痛惜した。彼に対する「流残敗亡の身悲しくも異郷に横たふ」という悪口も、自己自身の未来の無惨な姿かもし

れなかった。ドストエフスキー論、「文学論、酒、女」について真摯に語り合った歳上の友人、「僕の恋愛を最初人に打明けた」友人の「夢」が枯野をかけめぐっていると想われたのも当然であろう。つまり、異郷の地で文学にうちこむ自己や友人達の青春の成り行きや宿命を、厳しく自己対象化しようとしたのである。へ永遠なるものを思へ」と叱咤した友の文学をあえて次のように突き放つ。「風土に病む家」から一步も進むことが出来なかつたのぢやないか」と。ちなみにこの作品は良い短篇小説である。無念さの倒錯したこの死者に鞭打つ批判は、けれども、ただちに自己への批判へと転化される形になつてゐるからこそ胸を打つ文章であつた。へ自らの真摯で深い文学世界を創り出さねばならぬ」と。いわば、「彼の夢は、たしか、苦難の枯野を行き、日本の新しく大いなる時代に素晴らしい文学を創造することであつた」という認識へと通底してゐた。つまり、自らの「夢」の実現を促す底の文章に近似したものであつた。ただしここで氏は感傷を、異郷にある甘えを排した。そこに溺れると、それまでの苦闘が水泡に帰すと考えられたためであろう。友が途中で挫折した無念に真の同情を寄せつつも、毅然とその死に対面したのである。

蒙疆と北京を含めての九年間ほどは、戦争と異質の風土の渦中で青春であつた。氏の青春は、あてどのない彷徨に彷徨を重ねたものであつた。彷徨の量が増えるにつれて、文章の力が増し、解明すべき対象がだんだんと焦点を結びはじめた。いわばエミグラントとしての自己自身の在り方の「狂犬」性の認識から、民族や国家を超えた真の人間同士として青年たちの友情の醸成に至る足跡は、創造的青春の発見と深化に対応してゐたはずである。新聞社勤務、「燕京

「文学」の同人としての一種の公的生活の背後で、大柵欄の映画館、東安市場の喫茶店、日本人の来ない場末の酒場、音楽喫茶などの闇の中でひりひりするような自己省察が密かに繰り広げられていた。それがすなわち青春の底の底に沈降することにほかならなかったのである。

氏の幸運と不幸は、ひとつには中国人の本当の友人をつくりうるか否か、その上でどのような関係を保持しうるかという線上に展開され、その螺旋的運動の核へと収斂された。両国が交戦状態にある激動期・過渡期に、そして特に侵攻した側の日本人の一人として、中国人と真の友情を維持すること、発展させることの困難さに逢着せざるを得なかったからである。自分の意志や思いや願望と無関係に思われる境域で、無慈悲に関係性は叩きつぶされてしまう。「時代の子」と演劇付近」で氏はあるいは触れていたはずであるが、「第一回公演」の楊孝年のモデルは演劇家の陸柏年に相違あるまい。この時期にはまだその将来は予測できないにしても、彼の一年数カ月後の運命は言葉に絶するものがあつた。まず北京脱出の悲惨に見舞われざるをえなかった。その道筋は予感としてあつたのかもしれない。また、「貝殻」で大東亜文学賞を受賞した一六号の「燕京文学」に名前の見える袁犀の将来もやはり同様である。氏ら日本人の文学者や芸術家と淪陷区で生きた中国人のそれらとはもとより拒否するものや受け入れるものは異質であり、相反した。喘ぐように生きつつ、その中で互いのうちに秘められた真実を求めて、狭い僅かな回路を彼らは模索しつづけた。成功しても失敗しても、いずれにせよ厳しい状況と生を生きることにはほかならなかつたのである。さて、それではその結果はどのような成り行きを示したか。

この小論の記述はもはや、日本人の北京在住者や中国に関係したものと戦争に係わつたものの戦争責任と同時に戦後責任が問いかける位相に到達している。氏が四六年に日本に引き揚げてきて、病気を克服しつつ「烙印」以降の精神的な営為に賭けつづけた在り方は、そのことを端的に語っているのである。つまりその結果の一つとは、上海に逃れていった陸柏年のその地での日本憲兵隊による虐殺を知つたことである。このとき氏の青春は、無惨にも終焉を迎えたのである。氏は何一つ彼のためにできなかったからこそ、その喪失感と無力感は無言を絶したからにほかならなかつたのである。あえて近年の小説を引用するが、「鳩笛のない空」にこう書き込まれている。「そこには、うちひしがれて降りてくる二十五歳のわたし自身がいた。親日だったのか、抗日だったのか、それさえ確定し得ぬまま、ただ一人の中国人の親友を喪つた日本人の青春は、あの日終わつたのである。」これは五、六十年前におこつた精神的事件ではない。現在も、未来にも、形や性質こそいささか異なるであろうといえ、《青春》の根本的、象徴的な《徴》に相違ないのである。

氏がこの宿命と不運によく耐えて、文学をその線上で展開し、精神を飛翔させることができたこと、いや、そのように自らを強制したことが、竹内好や武田泰淳とは異なつた文学志向をよく深め得たといえるのである。淪陷区での八年間ほどは、結果論的にいえば、思いがけざる柔軟にして剛毅な魂をもつた作家の誕生を促していたことにほかならなかつたのである。

(文学部教授)